

ケアマネ あの目 この目

暮らしのそばに・・・

指定居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

ケアマネジャー 木村 晃子

初夏の出来事 要介護者のいる家族の小旅行

初夏、家族の介護をしている人が、小旅行にでかけたいという話しをしていた。要介護の家族は一緒に行くことを望んでいないし、一緒に行くというのも難しいらしい。介護保険サービスは利用していない。要介護と言っても、一人で留守番はできる状態で、「たぶん（数日間の留守番は）できるはず。」というのも、家族の見立てだ。結果として、この話しを聞いていた地域の人が、留守中に留守宅を訪問し、留守番をしている要介護家族の安否を確認していた。安否の確認と言っても、そこには、地域で暮らす者同士の交流があった。

家族が帰宅するまで、無事に過ごすことができた。



地域包括ケア？

この家族の小旅行のお話を聞いた時に、現在しきりに叫ばれている「地域包括ケア」という言葉が実現しているような気がした。「地域包括ケア」や「地域包括ケアシステム」とは、住み慣れた地域で最期まで暮らし続けられること、という意味合いだ。もっと平たく言うと、「地域まるごと支え合いのしくみ」、地域に暮らす全ての人の、居場所と出番がある暮らしのこと、と言っていた方もある。では、現実には、いかがなものか？相変わらず、資源整備に躍起になって、連携・連携と言いながら、当事者が置き去りにされている風潮はないだろうか？と感ずることが多々ある。

話しを元に戻そう。前述した家族の初夏の数日間は、家族の希望が叶ったこと、本人が、介護サービスの利用も、家族との旅行も希望していず、自宅で留守番をしていたという意向を持ち、それが地域の人に支えられて実現したこと。これは、まさしく、本人も家族も、地域に「まるごと支えられた」と言っても良いのではないだろうか。

ソーシャルケアマネジメント

ソーシャルケアマネジメントとは、長期にわたり、さまざまなケアを必要としている人々が自分のコミュニティの中で、安全で安心して暮せるように援助していく、多角的なソーシャルワークサービスのことです。ⁱ

私のような、日本の介護保険制度における介護支援専門員（ケアマネジャー）は、ともすると、地域に暮らし、ケアを必要とする人のニーズを、介護保険サービスのみに繋ぐという手法に偏っている印象もある。それは、介護支援専門員にソーシャルワークの力量がないという技術的な側面の話ではなく、介護保険制度における仕組みにも起因しているのではないかと。介護支援専門員の報酬の発生は、介護保険サービス（給付が発生するサービス）を調整し、利用があった時のみ算定することが可能なのだ。今、地域包括ケアの名のもとに、地域づくりや、介護を必要とする人のニーズに対応するのは、制度サービスのみならず、地域のインフォーマルな資源の活用が重要であると言いながら、インフォーマルサービスのみ調整した場合には、介護支援専門員の報酬は全く算定されないのだ。これは、一介護支援専門員が、どんなにやる気があっても、事業所（経営者）の理解がなければ、真のソーシャルケアマネジメントを実行することは難しい。

また、別の側面も考えてみよう。リスクマネジメントや、根拠というものが常に要求されている。誰からの要求なのか。それは、誰も責任をとりたくない社会からの要求ではないだろうか。私たちは、どのような状態においても、「絶対安全！」と言いきることができる状態の中で日々過ごしているわけではない。どんなに万全を期したつもりでも、予期せぬことが起こることもあるのだ。ある程度のリスクを覚悟しながら生きているのが人間だ。認知症患者が鉄道事故を起こした際に、責任の所在が追求されたことは記憶に新しい。結果として、同居の妻への責任は否定されたが、様々な条件下での課題は残されている。リスクマネジメントを徹底するとすれば、要介護高齢者のサポートを、制度サービスではないインフォーマル資源に結びつけることはかなりのハードルとなることは想像に難くない。しかし、何もかも、制度サービスに結びつけることをルーチンとしてしまうと、要介護者の意向は後回しにされ、その尊厳はどこへ行ってしまおうのだろう。



互いを知る

冒頭で紹介した家族の話は、地域で3年目に突入した認知症カフェの場でのことだった。認知症の当事者や、介護者家族、認知症や、介護全般について興味関心のある地域の人たちが集まって、日頃の思いを語り合う場所である。カフェが始まった当初は、現役介護者の参加も少なかったが、やがて口コミで広がり、現在は、定期的に参加する方が増えている。その中で、参加者同士は、地域の中に、どのような困り事を持った人がいるのかを知ることができるようになった。また、それぞれの「ちょっとできること」も見つけられるようになってきた。自分の地域で、どのような人が、どのような暮らしをしているか、ということを知ることが、それぞれの活動が広がっていくきっかけに役立っている。地元で長く暮らす人は、私たち専門職よりもずっとネットワークを持っている。そのネットワークを紹介してもらうことで、地域の中の人と人がつながっていくのだ。

私たちは、困り事が出来たとき、まずは身近なことから解決策を探すだろう。いきなり、あれこれ専門的資源の調達には走らないはずだ。まずは、自分のできること、自分たちのできること。そして、どこのだれに協力を求めるのか。常に、スタートは、本人のいるところから、と感じる。暮らしの主体者たちが、自分たちにできることを見つけられるようにというところを育んでいくことが、専門職に求められていることではないだろうか。

まずは、知り合うこと、ここが出発点である。

i 1 引用文献：ソーシャルケアマネジメントの基礎 ウィリアム G.ブルーグマン 著 発売
(株)成美堂